

エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第2番 Op.35》 —系譜をたどる— (3) 補遺

音楽教育講座 仲田 久美子

はじめに

これまでエディション比較研究ショパン《ピアノソナタ第2番 Op.35》—系譜をたどる— (1)ⁱ⁾ では第1楽章について、そしてエディション比較研究ショパン《ピアノソナタ第2番 Op.35》—系譜をたどる— (2)ⁱⁱ⁾ では2楽章から4楽章までの各エディションの主に聞こえてくる音の違いについて検証し、その検証結果から各エディションの系譜をたどってきた。この度、日本ショパンシンポジウムから拙論と岡部のエディション研究ⁱⁱⁱ⁾ とが類似しているという指摘があった。そこで、今回の「エディション比較研究ショパン《ピアノソナタ第2番 Op.35》—系譜をたどる— (3) 補遺」ではそれらについて以下に経緯をまとめ、同時に相違点についても述べたい。

曲目について

拙論では「ピアノソナタ第2番」を取りあげて比較検証している。筆者にとって重要なのはショパンのピアノソナタ第2番において、どのエディションにどのような音が記譜されているのか、音の違いや音の長さ、音の高さ、リズムの違いなどの点について、それぞれのエディションの違いを知ることにあつた。また、筆者が普段使用しているパデレフスキー版と、他のエディションとの間には曲の印象を変えるような違いが見受けられたため、「ピアノソナタ第2番の各エディションの音の違いははっきり認識しておきたい」と思い至つた。以上のような経緯によりショパンのピアノソナタ第2番についてエディションの比較に取りかかることにした。

使用した資料、エディションの表記方法について

筆者が使用した資料は次の全18楽譜である。楽譜の通称は出版社名で呼ばれるものと、校訂者名で呼ばれるものがあり、それらをどう呼ぶかについては自由であると考えたため、出版社名及び校訂者名のいずれかのアルファベットの最初の一部を略して記載している。略称は各エディションの最初にアルファベットまたは漢字を用い、いずれもアルファベット2文字で記載している。FEはフランス初版、EEはイギリス初版、GEはドイツ初版、Miはミクリが校訂したシャーマー版、Duはドビュッシーが校訂したデュラン版がそれに当たる。例えばCoは通称コルトー版で、コルトーが校訂しサラベール社から出版されたものであることを指す。しかし、Coとするか、Saとするかについては、他のエディションでもSa（こちらはショット社から出版されたザウアー校訂のエディション）という略称があるため、あえて避ける結果となった。この点について、略称は校訂者か出版社かのどちらかに統一して省略したほうがわかりやすかったかもしれない。拙論においては各エディションには通し番号をつけていない。以下は拙論から引用した使用楽譜一覧表とその略称である。

FE: Chopin, Frédéric. *Sonate, Op.35*, Paris: Troupenas & Co., 5/1840, T.891, ©Bibliothèque National de France, <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.

EE: Chopin, Frédéric. *Grande Sonate, pour le Piano Forte, Op.35*, London: Wessel & Co., 10/6/1840, W&CoNo3549, ©The British Library, <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.

- GE: Chopin, Frédéric. *Sonate pour le Piano, Op.35*, Leipzig: Breitkopf&Härtel, 5/1840, No.6329,
©University of Chicago Library. <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.
- Mi: Chopin, Frédéric. *Sonata*, edited&fingered by C. Mikuli, New York: Schirmer, 1895,11744.
- Du: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by C. Debussy, Paris: Durand,[c.1915], D&F9708.
- Co: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by A. Cortot, Paris: Salabert, 1930, E.M.S.5192.
- Ka: Chopin, Frédéric. *Sonate*, compiled by A. Lipsky, New York: E.F. Kalmus,[c.1947].
- Pe: Chopin, Frédéric. *Sonaten*, kritisch revidiert von H. Scholtz/ Neue Ausgabe von B. v. Pozniak,
Frankfurt: c.f. Peters,[c.1948], 9899.
- Sa: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by E. Sauer, Mainz: B.Schott's Söhne,[c.1948], 0398/99.
- Kl : Chopin, Frédéric. *Sonate*, revised by C. Klindworth and X. Scharwenka, London: Augener's, 1949,
No.304
- 春秋: Chopin, Frédéric. *Sonata*, 井口基成校訂、東京: 春秋社、1978年、(第1刷は1949年発行)。
- Ku: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, Ridi. Dr.V. Holzkeht/ Revidoval V. Kurz, Prague: m, 1949, M106.
- Ri: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by Brugnoli- Montani, Milano:Ricordi,[c.1956],E.R.2501.
- Ag: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by G. Agosti, Milano: Curci, 1965, E.8098C.
- He: Chopin, Frédéric. *Klaviersonate*, edited by E. Zimmermann, fingering by H.M. Theopold, München:
Henle, 1976/2004, 289.
- Kr: Chopin, Frédéric. *Sonate*, L. クロイツァー校訂、(訳者不明)、東京: 音楽之友社、1992年。(=
edited by L. Kreutzer, Berlin: Ullstein,[c.1924], T.A.183.)
- Pa: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, I.J. パデレフスキー校訂、田村進、寺田由美子訳、東京: アーツ出版、
1993年。(= edited by I.J. Paderewski, Krakow: PWM, 1950, PWM235.)
- Ek: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, edited by J. Ekier, Krakow, PWM, 1995/2004, PWM9731. ^{iv)}

チェック項目について

比較の際のチェック項目の分類方法は筆者と岡部で異なる点がある。^{v)} 拙論 a では第1楽章の①和声に関わる音の違い、②タイによってメロディの変わる音の違い、③タイによって和声の充実度が変わる音の違い、④記譜の違い、すなわち異名同音、反復記号の違い、及び⑤その他(スラー、スタッカート、テヌート、強弱記号)の5点を比較し、拙論 b では第2楽章から第4楽章の音の違いのみに焦点をあてて比較している。いずれも、主に演奏の際に聞こえてくる音の違いそのものに焦点をあてて比較している。その理由は、音そのものだけが音楽の要素ではないが、音そのものが違うことで曲の印象が変わることがあると考えるからである。この点についてはピアノ学習者やピアノ教師などが譜読みの時点で知っておきたい点であろうと思われる。筆者はスラーについては第1楽章の中での目立ったものしか取り上げていない。

初版及びその他のエディションの扱い方について

初版とその他のエディションを並列して比較検証している点で筆者と岡部は同じ手順を追っているが、系統を探るためには初版を根源として捉えることになるため、どのような手法をとった場合でも初版の扱いは同様になるであろうと思われる。^{vi)} その他、筆者は出版年に沿ってエディション同士の関係についても推察している。

系譜図について

系譜図の表し方について、拙論 a の系譜図及び拙論 b では各エディションの出版年の前後関係はわかるようになっているが、各エディションの出版年は記載していない。また、各エディションがフランス系統とドイツ系統のどちらにより近いかという点については、その位置付けがわかりにくい面もある。とはいえ、拙

論の系譜図では《どのエディションがどのエディションと共通点が多く記譜の内容が近いと思われるか》ということと《それらのエディションの出版年の前後関係》がわかることから、系譜図というよりは分類図に近いものとなっている。なお拙論ではイギリス初版も系譜に含めている。^{vii)}

結論について

拙論 a 及び拙論 b は系譜をたどるというよりも、むしろ各エディションの相互関係を明らかにするという特徴がある。両者共に、各エディションの類似率から系統図を作成し系統を明らかにする、という手順で検証が行われている。そして、前述の通り、全18楽譜を比較するうえで初版も他のエディションも同じチェック項目と同じ比較方法で類似率を導きだしている。ただしこれは第1楽章の①和声に関わる音の違い、②タイによってメロディの変わる音の違い、③タイによって和声の充実度が変わる音の違い、④記譜の違い、すなわち異名同音、反復記号の違い、及び⑤その他（スラー、スタッカート、テヌート、強弱記号）の5点と、第2楽章から第4楽章の音の違いのみで比較検証したときの類似率である。上記以外のチェック項目に、更にチェック項目を加えたり、同じジョパンにおいても別の作品で検証したりした場合には類似率が異なる可能性も十分に考えられる。以下にこれまでの拙論で述べてきたエディションの系譜についての見解の中で岡部と異なる点について記す。版名については一般的な呼び名を用いることとする。

—デュラン版について—

拙論 a ではデュラン版がペータース版に似ていると述べた (p.88)。その後、この主張の更なる裏づけとして、拙論 a の⑤以外の音の違いについてのチェック項目①から④までの全27項目と、拙論 b のチェック項目全22項目のうち、EE にしかない特徴（仲田 b の②5、②7、②9及び③6）である4項目を除いた全18項目（合計45項目）に焦点を当てて再検証してみた。拙論 b では第2楽章から第4楽章の音の違いで比較した結果、91.42%の類似率ということがわかっているが (p.61)、さらに今回《音の違い》という点だけに焦点を当てて全楽章を通して再検証した結果、全45項目中41項目において共通していた。類似率にすると91.11%の類似である。したがって、デュラン版は音の違いだけでみると限りなくペータース版に近いといえるのである。

更に、デュラン版とペータース版には下記の第1楽章の一部分のように両者にしかない共通した項目もみられる（仲田 a、p.83）。

図1：①—10、第151～152小節、ト音譜表、各小節前半3連符2つ目の音について

10) 第151～152小節、ト音譜表、各小節前半3連符2つ目の音が g^1 / g^2 音なのは Du と Pe で、その他の版では ges^1 / ges^2 音である。【譜例8】第149～152小節



もっとも、デュラン版とペータース版には「第1楽章の第120小節、へ音譜表、1拍目の最下音がH音なのは Ge、Mi、Kr、Pe、春秋、Pa、Ku、Ri、He で、その他の版では B 音である」（仲田 a、p.82）のような違いもある。とはいえ、概してデュラン版とペータース版には共通点が多くみられるのである。

—クロイツァー版について—

クロイツァー版に関しては、「FE とは51.42%、EE とは37.14%、GE とは62.85%の類似であった。また Mi とは68.57%、Du とは54.28%の類似であった。これらのことから、Kr は Mi に最も類似し、また GE と比較的近いといえる」（仲田 b, p.61）とし、クロイツァー版はミクリ版とドイツ初版に比較的似ているという結論に至った。^{vi)}

—コルトー版について—

デュラン版と同じフランスのパリにある出版社から出たコルトー版については、デュラン版と同じフランス系統のエディションではないかと予測していたが、コルトー版が一番似ているのはミクリ版であった（仲田 b, p.61）。そのため拙論では、ミクリ版はフランス初版の系統と位置付けている。^{ix)} この度行ったデュラン版とコルトー版との再比較では、前述の45項目中、28項目において共通しており、62.22%の類似率である。音の違いだけで見るとさほど高くない類似率である。むしろ、コルトー版はミクリ版に近く、上記45項目中38項目で共通しており、類似率は84.44%である。コルトー版のような実用版ではスラー、スタッカート、テヌート、強弱記号などの要素は校訂者の考えが反映されやすい。そのため音以外の点について検証するとエディションの個性がより強く出ると考えられる。その一方、音そのものの違いは出にくいであろう。結果としてコルトー版はデュラン版よりミクリ版に近いといえると思われるのではないだろうか。

—ペーターズ版について—

拙論 a 及び拙論 b では、ショルツのペーターズ版とショルツ・ポツニアックのペーターズ版を同じ出版社であることから内容が同一であろうという予測のもとで検証をした。その判断はショルツ・ポツニアックのペーターズ版とそれ以前に出版された他の楽譜との関連から導き出した（仲田 b, p.61）。以上の点からも、拙論ではショルツ・ポツニアックのペーターズ版はフランス系統に近い位置にあると結論付けている。^{x)}

拙論 a の系譜図（p.90）ではショルツ・ポツニアックのペーターズ版とショルツのペーターズ版の両方を系譜図に掲載しなかったため、やや混乱を招く可能性があったかもしれない。

—春秋社版について—

拙論では1949年に出版された春秋社版についても検証している。拙論 a では、

「そして、春秋には「ペーターズ版では」（井口基成校訂、春秋社、1978年、10頁）とあることから、Pe を参考にした可能性がある。また、同じ箇所において Du でも本位記号がつけられ G 音になっていることを考えると、ここで Pe だけに限定している春秋は、Du とはあまり関係がないと思われる。また、「日本の出版社が出しているショパンの楽譜は、ほとんどこの（= PE, c.1948）ショルツ=ポツニアック版を底本にしている」（栗山、78頁）ことから、春秋は Pe に近いということがわかる」（p.88）

と推察している。つまり、ここでは春秋社版とデュラン版とはあまり関係がないと結論付けている。しかし、その後の拙論 b で、

「1949年に出版された春秋は、Pe に88.57%類似しておりほとんど同じであるといえる。このことから、春秋は Pe の影響を大きく受けていると思われる。例えば第1楽章の第151小節と第152小節にある注では「ペーテルス版その他では『ㇿト音』になっているが、『変ト音』の方が正しい」とある。なお、『ㇿト音』なのは Du、Pe、Kl である（岐阜大学教育学部研究報告人文科学第59巻第2号、2011年3月82頁参照）。つまり、ここで言う「その他」とは Du のことであると推測される。また、第3楽章の第7小節と第8小節の注には「コルトー版では初めの二つの音は次のように附点音符になっている」とある。付点音符なのは

GE、Co、Ka、Sa、Kl、Ku、Ri、Ag、He、Krであるから(②-2参照) Co以外の版は参考にしなかった可能性が考えられる。他には第3楽章の第84小節の注において「コルトー版その他では『変二音』が『変ロ音』となって、和音の第三音が省かれている」とある。『変ロ音』なのはMi、Co、Sa、Kl、Ag、Pa、Ekである(②-10参照)。つまり、「その他」の版はMiを指していると考えられる。第4楽章の第12小節の注では「多くの版は『変ホ音』であるが、『変ロ音』の方がよいと思う」とある。ここでの「多くの版」とはFE、EE、GE、Mi、Duのいくつかを指していると考えられる(③-1参照)。以上をまとめると春秋はMi、Du、Pe、Coを参考にした可能性が高いと考えられる」(p.61)

と述べている。

以上のような考察をふまえ、ミクリ版、デュラン版、ペータース版、コルトー版と春秋社版について、それぞれを45項目について再比較してみた。すると、春秋社版はミクリ版とは31項目で共通し68.88%の類似率に、デュラン版とは36項目で共通し80.00%の類似率に、ペータース版とは40項目で共通し88.88%の類似率に、コルトー版とは29項目で共通し64.44%の類似率であった。前述(—デュラン版について—を参照)のように、ペータース版とデュラン版の類似率が91.11%であるため春秋社版がよりどちらに近いのかを限定するのは難しいが、全楽章を通して強弱記号なども比較検証したり、ショパンの他の楽曲で比較検証したりすれば、どちらにより近いのかわかる可能性がある。

春秋社版の特徴的な音(第4楽章の第12小節目、両譜表において1つ目の3連符のうち、2つ目の音がes音であるか、e音であるか)については、春秋社版がes音を採用しており、同じくes音を採用している春秋社版より前に出版されているのはコルトー版だけである。またクロイツァー版では同じ箇所について「編者は変ホがより合理的だと考える」という春秋社版と同様のコメントが記載されている(クロイツァー版の実際の譜面ではe音を採用している)。出版年はクロイツァー版のほうが早いため、春秋社版がクロイツァー版を参考にした可能性もないわけではないが、それについては不明である。^{xi)}

—パデレフスキー版について—

拙論ではパデレフスキーの異名同音も比較の対象とした上で、拙論aの系譜図と拙論bでペータース版に近いとしている(p.61)。^{xii)} 筆者が異名同音も比較の対象に含めたのは、普段パデレフスキー版を使用している筆者にとってはこの点が重要であったこと、そして系譜をたどる途中段階で相互関係を探るために欠かせないポイントだと考えたことからである。校訂者によって異名同音に書き換えられた部分の前後関係の調性が#系かb系かという違いは、たしかに非常に感覚的なものであるかもしれないが、たとえ聞こえてくる音は同じであっても、演奏する際の心構えが異なる可能性があると考えられる。ショパンのエディションの系譜や原典にどれだけ正確であるかという点、また校訂者による書き換えの多い少ないなどは別の観点でパデレフスキー版をみた場合、パデレフスキーが異名同音に書き換えたことを筆者は興味深いと考えている。^{xiii)} また、1948年頃に出版されたショット版や1965年に出版されたクルチ版(アゴスティ版)においても異名同音に書き換えがなされている(仲田a、p.85)。

—リコルディ版について—

拙論aでは、パデレフスキー版、クルツ版、ショット版に、つまり、ペータース版に近いとした(系譜図、p.90)。系統としてはフランス、イギリス系統であると結論付け、拙論bでは、クルツ版、ペータース版、春秋社版に近いと結論付けた(p.62)。出版年からみると、春秋社版の第1刷が1949年に発刊されているが、リコルディ版が日本で発売されたエディションを参考にしたかどうかについては不明である。^{xiv)}

—クルチ版について—

拙論ではアゴスティの頭文字をとりAgと略記している。アゴスティ版と呼ぶほうが耳慣れている場合も

あるかもしれないがここではクルチ版とする。拙論 a ではコルトー版、リコルディ版、ショット版に近いとし（系譜図 p.90）、その後、拙論 b において「Pe と春秋と Ri に 80.00%、Pa とは 85.71% の類似であった」（p.62）とし、クルチ版はパデレフスキー版に最も類似しているという結論になった。^{xv)}

—エキエル版について—

拙論 a では、エキエル版はミクリ版とフランス初版に近いとし（p.90）、拙論 b では「音の違いという点だけでみた場合、Ek と一番共通点が多かったのは Mi と Co で、56.71% の類似であった」（p.62）、という結論であった。この度、改めて全楽章の音の違い 45 項目で検証し直してみたが、音の違いに焦点を当てて比較した場合、エキエル版に一番近いのはコルトー版で 73.33% の類似率であった。ミクリ版とは 45 項目中 31 項目で共通しており、類似率は 68.88% であった。なお、フランス初版とは 45 項目中 29 項目で共通し、64.44% の類似率に、また、ドイツ初版とは 25 項目で共通し、55.55% の類似率であった。以上のことから、音の違いという点だけでみた場合、エキエル版はどちらかというフランス系統であると考えられる。^{xvi)} なお、エキエル版の比較検証を行う際、楽譜上でいくつかの演奏の選択肢がある場合、筆者は大きな音符で記譜された方を採用している。

まとめ

今回の「エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第 2 番 Op.35》——系譜をたどる——（3）補遺」ではエディションの系統をどのように分けし、たどっていったかについて述べてきた。筆者の研究の発端は前述の通り「ピアノソナタ第 2 番の各エディションの音の違いはしっかり認識しておきたい」というものであった。そのためには、初版及びそれ以外のエディションを見る必要があり分類することが必要である、と考えてエディション比較研究を行ってきた。比較の方法としては、各エディションを分類し相互関係を探ることによって系統をたどる方法をとった。そして主に「音の違い」に焦点をあてて比較検討するという立場ですすめてきた。系譜をたどる方法としてこの検証方法が最適であるかどうかは定かではないが、分類して系譜をたどるためのひとつの方法として適当であると考えている。

最後になるが、筆者はこのエディション研究によってショパンの創作過程を明らかにすることを目的としていない。また、最新の研究成果はもとより、すべての参考文献を網羅できていない現状ではあるが、この点に関しては日本ショパンシンポジウムからの指摘に感謝するとともに、今後の研究活動にいかしていきたいと考えている。

参考文献一覧

- 多田純一「[ナショナル・エディション]とショパン作品におけるエディション選択の問題点」『日本ピアノ教育連盟紀要』28号、p.61-75、2012年。
- 岡部玲子「ショパン作曲バラード第 4 番のエディションの系譜」『常磐大学短期大学部研究紀要』19号、p.22-36、1990年。
- 岡部玲子「ショパン作曲バラード第 4 番のエディションの系譜 No.2～ペダル記号と運指の数字～（日本におけるショパン受容の研究へ向けて）」『常磐大学短期学部研究紀要』23号、p.57-71、1994年。
- 岡部玲子「パラダイム手法によるショパン《バラード全 4 曲》のエディション研究」博士論文、お茶の水女子大学、2001年。

註

- i) 「エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第 2 番 Op.35》第 1 楽章—系譜をたどる—」仲田久美子 岐阜大学教育学部研究報告第 59 卷 2 号 2011、p.89-90 以下、拙論 a または仲田 a と記す。
- ii) 「エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第 2 番 Op.35》第 1 楽章—系譜をたどる（2）—

仲田久美子 岐阜大学教育学部研究報告第60巻1号(2011年) p.79-90 以下、拙論bまたは仲田bと記す。

- iii) 岡部1990:「ショパン作曲バラード第4番のエディションの系譜」岡部玲子 常磐大学短期大学部研究紀要19号(1990)、岡部1994:「ショパン作曲バラード第4番のエディションの系譜No.2~ペダル記号と運指の数字~(日本におけるショパン受容の研究へ向けて) 岡部玲子 常磐大学短期大学部研究紀要23号(1994)、岡部2001:「パラダイム手法によるショパン《バラード全4曲》のエディション研究」岡部玲子(2001) お茶の水大学博士論文
- iv) 岡部の資料は全16点であり、拙論にはないクリントヴォルト版、ショルツのペーターズ版、ウィーンユニバーサル版、ガンシュ版、旧エキエル版が検証されているが、その一方でザウアー校訂のエディションとクルツ校訂のエディション、そして春秋社版は検証の対象としていない。以下に岡部が使用した資料「通し番号とエディションの略称」を引用掲載する(岡部1994、p.61-62)。なお、資料提示は岡部1990、岡部1994ともに同様の通し番号がつけられている。
 - 1) Klindworth, Charles. Ed. (以下 Kl-Ed と記す) 年代不詳 (Berlin : Bote & G.Bock) [ca.1873/76(Moscow : P.Jürgenson)]
 - 2) First critically revised complete edition (以下 GA と記す) 年代不詳 (New York : Belwin Mills) [ca.1878/80 (Leipzig : Breitkopf & Härtel)]
 - 3) Mikuli, Carl. Ed. (以下 M-Ed と記す) 年代不詳 (New York : Schirmer) [ca.1879 (Leipzig : F. Kistner)]
 - 4) Scholtz, Herrmann. Ed. (以下 S-Ed と記す) 1879 (Leipzig : Edition Perters)
 - 5) Pugno, Raoul. Ed. (以下 Pu-Ed と記す) 年代不詳 (Wien : Universal)
 - 6) Debussy, Claude. Ed. (以下 D-Ed と記す) 1915 (Paris : Durand)
 - 7) Kreutzer, Leonid. Ed. (以下 Kr-Ed と記す) 1924 (Berlin : Ullstein) 1973 (東京 : 音楽之友社)
 - 8) Cortot, Alfred. Ed. (以下 Co-Ed と記す) 1929 (Paris : Salabert)
 - 9) Ganche, Edouard. Ed. (以下 G-Ed と記す) 1932 (London : Oxford University Press)
 - 10) Casella, Alfredo. Ed. (以下 Ca-Ed と記す) 1947 (Milano : Curci)
 - 11) Paderewski, Ignacy Jan. Ed. (assisted by L. Bronarski and J.Turczyński) (以下 Pa-Ed と記す)
 - 12) Scholtz, Herrmann. / Pozniak, Bronislaw von. Ed. (以下 SP-Ed と記す) 年代不詳 (Leipzig : C. F. Peters)
 - 13) Brugnoli, Attilio. / Montani, Pietro. Ed. (以下 BM-Ed と記す) 1956 (Milano : Ricordi)
 - 14) Ekier, Jan. Ed. (以下 E-Ed-1 と記す) 1967 (Warszawa : Towarzystwo im. Fryderyka Chopina / Kraków : Polskie Wydawnictwo Muzyczne)
 - 15) Zimmermann, Ewald. Ed. (運指法 : Theopold, Hans-Martin) (以下 Z-Ed と記す) 1976 (München : G. Henle Verlag)
 - 16) Ekier, Jan. Ed. (以下 E-Ed-2 と記す) 1986 (Wien : Musikverlag Ges. m. b. H. & Co.)
- v) 岡部は①音の違い、音の長さやリズムの違い②スラー③発想記号という3項目について違いに焦点をしばり検証している(岡部1990、p.23)。また、各エディションのスラーの特徴が書かれておりこの点が非常に興味深い(岡部1990、p.25)。
- vi) 岡部が比較する際の基準となっているのは、何よりも初版がどうであるかということであり、したがって、初版との関係性で系譜をたどる手法を採用している。そのため、全体のエディションを比較する前段階として、岡部はまず3つの初版のそれぞれの異同点を比較検証することから始めている。このことにより系統の特徴がよりわかりやすくなっている。
- vii) 岡部の系譜図(岡部1990、p.32)では出版年が縦軸、フランス系統かドイツ系統なのかが横軸で表記されている。またイギリス初版については「E-EAは、各エディションに取り入れられている割合が少ない

ので省略した」とある。また、各エディションに校訂者による加筆の多少を◎○△×で表記しており判別しやすい。例えばパデレフスキー版は1949年の出版の縦軸に位置し、系統を表す横軸ではややフランス系統寄りにある。そして○印が付けられていることから校訂者による加筆がそれほど多くないことがわかる。そして、ペダルの系譜図（岡部1994、p.67）ではパデレフスキー版はややフランス系統には変わらないが△印が付けられており、音の高さと長さ、スラー、発想記号と標語の系譜図（岡部1994、p.67）でパデレフスキー版はややフランス系統で○印が付いている。以上のことから、パデレフスキー版はややフランス系統でペダル記号については校訂者による加筆が多いことがわかる。

- viii) 岡部はクロイツァー版について、「一応、F-EA と D-EA の二つの系統を引いている。E-EA も少し取り入れている。しかし、校訂者によるオーセンティックでない加筆が非常に多い」（岡部1990、p.28）と指摘している。
- ix) 岡部はデュラン版とコルトー版は数字データからの結果を踏まえて「よく似ているので、一緒に扱う」（岡部1994、p.64）としている。また「D-Ed と Co-Ed のみに現れるペダルも10ヶ所ある」（岡部1994、p.64）と指摘している。これは、ペダルの面に焦点を当てて検証した場合には、他にはない共通点が見つかることを示している。つまり、先に出版されたデュラン版をたどるとフランス系統となるため、双方ともにフランス系統ということになる。また、岡部は「4）S-Ed、5）Pu-Ed、6）D-Ed、8）Co-Ed は、よく似ており、ペータース版の影響力を見たわけだが（後略）」（岡部1994、p.66）と述べている。
- x) 岡部はショルツのペータース版について「F-EA 系統で、D-EA も取り入れている。しかし、校訂者によるオーセンティックでない加筆が多い」（岡部1990、p.27）とし、岡部1994では「D-EA 系統を引いている」（岡部1994、p.63）と結論付けている。
- xi) 岡部は日本の楽譜について、「それまで長い間日本で使用されていたのは、1）全音版、2）音友版、3）井口版、4）クロイツァー版であった」と述べている。そして「全音版と音友版について12）SP-Ed そのものである」（岡部1994、p.69）と鋭い指摘をしている。このことから日本でのペータース版に対する信頼が伺える。
- xii) 岡部は「Pa-Ed は、F-EA 系統である。しかし、校訂者によるオーセンティックでない加筆もある」（岡部1990、p.29）と述べている。
- xiii) 岡部はパデレフスキー版の異名同音の書換えについて「異名和音の書き換えは、「校訂者による加筆」の数に含めない」（岡部1990、p.33）と注13）で述べている。
- xiv) 岡部はリコルディ版について「BM-Ed は、F-EA 系統で D-EA も取り入れている。しかし、校訂者によるオーセンティックでない加筆が非常に多い」（岡部1990、p.29）と述べている。
- xv) 岡部はクルチ版について「F-EA 系統で D-EA も少し取り入れている。しかし、校訂者によるオーセンティックでない加筆が非常に多い」（岡部1990、p.29）と指摘している。
- xvi) 岡部はエキエル版1967とエキエル版1986の両者について「ほとんど同じである」（岡部1990、p.30）とし、「F-EA、E-EA、D-EA に見られる各々の独自のヴァリエーションの採用のしかたが異なっている箇所があるので（後略）」（岡部1990、p.31）と述べている。また、両者がほとんど同じであることをふまえ、これらを D-EA 系統である、としている。そして「特に、「音」において、他のエディションでは無視されてきた E-EA の優れたヴァージョンを、積極的に取り入れている」（岡部1990、p.30）と指摘している。拙論では旧エキエル版は検証の対象としていない。